

目指す学校像

高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 13 (R3. 7. 8発行) 文責 校長 福田雅也

三つ子の魂の中に…

「三つ子の魂 百まで」…誰もが知ることわざです。このことわざの意味を文字通りに理解すると「3歳の時点の性格や気質が大人になっても続く」となるのでしょうか。「三つ子」は3歳児という意味ですが、通常このことわざでは、それが転じて幼子全般を指していると考えられます。それでも、昔の人が「三つ子」としたのは、理由がないわけでもないようです。発達心理学の観点では、人は生まれた瞬間から連続的に成長しているのですが、3歳くらいになると、おしゃべりになったり、いたずらをしたり、個性がかなり急激に表れてきます。加えて、感情を言葉で表現したり、経験したことが記憶として残ったりするのも、おおよそ3歳ごろだそうです。このように考えると、そのころに見聞きした強く心に残る経験が、その後のその人の人生に長く大きな影響を与えることは十分に考えられます。このことから「三つ子」となっているのかもしれない。こんな一例を見つけましたので紹介します。

一度この学校便りでも紹介したことのある、「二度とない人生だから」という詩の作者、坂村真民さんは、ある対談で下のような話をされています。

母に関して、私にはいまだに忘れられない夢のような美しい思い出があります。それは、まだ幼い私をおんぶした母が、田んぼの中にある共同墓地に行き、乳も飲めずに死んでいった童男、童女の墓石に白い乳をしぼってはかけ、しぼってはかけて拝んでいる姿です。体格のよかった母は、私の妹に飲ませて、なお余りあるほど乳が出ていたんでしょうね。ぼくはいまでも、その墓地で、おふくろが乳をかけて回っている姿がはっきり浮かんできます。「これはなあ、乳も飲まんで死んでいった子よ。だから、乳を飲ませてあげるのよ」というて。私は、母がよう4歳の私を連れていってくれたと思うんです。私が今日、信仰をしっかりと持つことができたのは、深く掘り下げていくと、ここに行き着く。だから、私は若い母親たちに必ず、言うんです。こういうことは見たことも聞いたこともないだろうが、と。母の姿を、子どもは見とる。あの姿を見たら、あと、しつても何もいらん、と。幼い子に何を刻みつけてくれるかということ、三つ子の魂の中に、何を注ぎ込んだかということです。

今の時代では到底考えられない心に響く話です。坂村真民さんのお母さんのすごさを感じるとともに、母親には、子どもの魂の中に何かを刻みこむ偉大な力があることも感じさせてくれます。

さらに、坂村真民さんは、人々の心を打つ多くの詩を残されていますが、その詩についても次のように話されています。

「私が詩を書く理由は、母の大きな恩に少しでも報いたい。恩を返したいからなんです。」

この話の中の坂村真民さんのお母さんのような言動は誰にでもできることではありません。この話を私たちが参考にできるとしたら、子育ての中で、「言葉で自分の思い通りの行動をさせよう」とするのではなく、「行動で子どもの心に思いを届けよう」とすることではないかと思えます。「三つ子の魂 百まで」のことわざで書き始めましたが、小学校時代の子どものくらいまでは、十分にこのことわざが当てはまるのではないかと思います。

「毎日繰り返される忙しい日常の中で、そんな理想論ではやっていけない。」という声が聞こえてきそうです。その通りだと思います。ですから、このような話があるという事実を知り、頭の片隅に置いておくだけでいいと思います。そのことで、私たちの言動に少しだけでもいいので、良い変化が表れればそれで十分だと思うのです。